

あ 旭輝る 山田画伯の 名画あり

山田茂人画伯は昭和4年、小網代に生まれる。少年の頃より画家を志し、23歳で多摩美術大学に学ぶ。昭和30年、日展に初入選以来17回入選。特選を含め数々の賞を受賞し60年日展会員となる。昭和57年テレビ愛媛で「山田茂人えひめ人その風土」放映、昭和62年南海放送で「人間歳時記山田茂人」放送される。作品「旭」300号（松山全日空ホテル所蔵）、「南房」（愛媛県立美術館所蔵）、「石鎚展望」（愛媛県議会所蔵）、「旭」（真穴小中学校体育館展示）。没年平成3年2月。

い 石段が 三百続く 大神宮

この石段は神明神社の参道である。この神社は江戸時代の初め頃創建され、祭神は天照皇大神、豊受姫命、火産霊神である。安政4年（1857年）に海拔105mの愛宕山に増築され、長命講伊勢踊りが盛んである。石段は大正7年（1918年）に氏子達の寄進と労力奉仕で作られ、用材には花崗岩が用いられている。直線の部分は190段余り、それから下に100段、合わせて約300段である。

う 宇和海を のぞむ浜辺で エンコ祭り

海辺に生活する人々にとって、エンコは恐ろしいものであり、「エンコに引っぱられるな」とお互いに戒め合ってきた。人々はエンコのことをカッパともいい、水中に住んでいる一種の動物と考えているが、穴井地方では、ミズチ（水霊）と考え、水神さんと信じている。だからエンコ祭りは水天宮祭りともいう。旧暦の4月5日、地区の人々は弁当を持って灘の浜へ出かけ、始めにおにぎり3個を波打ち際に供え、竜王様のほこらにお参りしてから弁当を開いて水難防止を願った。

え 愛媛県の 文化財です 伊勢踊り

伊勢踊りは1624年頃に高知県から南予に伝わって来た。穴井へは1680年頃に伝わったといわれている。その頃は年に3回踊りを奉納していたが、明和2年長命講の組織が出来てから旧暦の毎月11日に踊りを奉納するようになった。その後次第におとろえたが、1857年（安政4年）に神明神社が今の場所に増築された際に強化されて現在に至っている。長命講伊勢踊りは長い伝統と古い形の踊りが評価されて、昭和38年5月に県の無形文化財に指定された。

① 大釜は 焼物の里 窯のあと

1802年（享和2年）頃、松山風早郡菊間の住人權吉という人が、大釜に来て開村し土瓦焼きを始め、真網代より妻を迎え大釜の住人となった。瓦焼きはその後盛んとなり、近隣の村々はもとより宇和島方面へも大量に送り出していた。その頃、穴井南浦の山下でも製造していて、共々に宇和島へも送り出していたとのことである。

か 蕪島を 浮き上がらせて 日が沈む

宇和海を真っ赤に染める夕日は季節により沈む位置が変わる。ある時は日本一細長い佐田岬半島であったり、ある時には九州と岬の水平線の彼方に「達磨夕日」の現象を起こして沈む。その光景を待つカメラマンの姿もみかける。真穴小学校の校歌にもある蕪島（かぶしま）の沖に燃える夕日は、格別に赤く雄大である。刻々と沈む様子は、海際に波しぶきの上がりそうな気配さえ見せ、まさに絶景である。

き 菊太郎翁 天満神社に 胸像あり

橋本菊太郎翁は1892年11月穴井に出生。陸軍の兵役終了後渡米を志し、東南アジア・中東・欧州を経て1914年米国に上陸した。苦勞の末、財を成して1958年帰国。寺総代なおどをして地域に貢献、特に地区公民館建設には多大な寄付をしてその機運を盛り上げた。その他学校・天満神社・福高寺等にも多額の寄付を行い、市制40周年記念式典には、市政功勞者として表彰された。翁の胸像が天満神社境内に建立されている。

く くどき歌 響きでみんなで 盆踊り

盆踊りは、月遅れのお盆、8月13日から16日の間に行われ、真網代は13日に穴井は14日の夜である。先祖の精霊を迎え慰めるために、くどき歌に合わせて踊る。太鼓の音に合わせる子どもたちの囃子声がいっそう情緒を深める。近年は、帰省客も交えて踊る民謡などで一層盛り上がりを見せている。同夜行われる花火大会も興をそえる。

け 源蔵前 打瀬船で アメリカへ

真穴は明治大正の頃、多くのアメリカ渡航者を出した村として「アメリカ村」と呼ばれる。大正2年、打瀬船（うたせぶね）と呼ばれる長さ15mほどの小さな漁船で、アメリカ大陸を目指して15人の若者が源蔵前の渚から出航した。潮流と帆・磁石（北針：きたばり）を頼りに大波激浪と戦いながら太平洋を横断し、サンフランシスコの北ポイントアレナに上陸した。このような先人の時代を切り拓いた精神を受け継ぐ道標とするため、源蔵前に記念碑が建つ。

② 金比羅様 伊予の小天狗 相撲とる

1762年二宮家8代の仁兵衛直保氏は讃岐象頭山より、金比羅大権現の分霊を字山に移し、金比羅山と称し祀る。その場所は、真穴と川上の山境いで、その林の中には今も境内や参道の石組があり、祠には漁業の守り神らしくサンゴのかけらも残っている。大祭日には、四国周辺の相撲とりが集まった。真網代出身の「宮の花」は、高知県の強い力士と勝負し、「伊予の小天狗」と四股名をもらった。

さ 佐海銀行 八幡浜市誌に 名を残し

佐海駿助（さかいていすけ）は1882年1月穴井に出生。1910年合資会社佐海銀行を創立。続いて佐海殖産合名会社を創立して金融業、植林果樹栽培、不動産賃貸等地域の産業に貢献した。1914年には、33歳の若さで真穴村村長に就任、又西宇和郡の郡会議員になり地域の発展に尽くした。銀行は後に八幡浜商工銀行と合併、さらに伊予銀行と合併。佐海氏は、1918年、スペイン風邪といわれたインフルエンザの為37歳で没した。

し 島めぐり 中学生は 筏こぎ

平成6年8月に「先人の夢とロマンを求めて」全校生徒によって筏7隻を作り、開拓精神を受け継ごうと始まった。今では真穴中学校伝統行事となり、各班に分かれ竹や養殖用浮力材を活用して筏を作る。小網代の海岸から出航し、蕪島（かぶしま）を目指して力漕するレースを地域あげて応援している。生徒たちは上陸した蕪島よりふるさと真穴を望みながら達成感を味わっている。

す 住吉神社 お練り牛鬼 おおあばれ

真網代の春祭りでひときわ大きく目を引く牛鬼。頭が鬼で、首から下は牛の胴体を持っている。牛鬼は南予地方に広く分布しており、歴史はおよそ200年といわれ、現在の形になったのは昭和の初めからだという。祭りの主役である牛鬼は、神霊が宿り神の化身とみなされ、悪霊を払うものとして敬う風習がある。祭りにおいては、神輿の先駆けとして、地域の悪魔払いの重要な役割を持っている。

せ 選果場 真穴のシンボル 青い屋根

明治45年に真網代柑橘組合が発足したが、荷造り・出荷は各家庭で行われていた。大正15年、協同荷造場が真網代と小網代に、昭和3年には穴井にも建築されて、共同荷造り出荷が始まった。昭和38年には各選果場を統合し、海を埋め立て現在の地にオートメーション化された選果場が完成した。航空機の飛行の邪魔にならないよう屋根は青く塗られた。

⑥ 宗吾霊堂へ 続く参道 花吹雪

佐倉宗吾（さくらそうご）は千葉県成田市佐倉の農民で、江戸時代初期に重税に苦しむ農民達の為に一揆を起こし、将軍に直訴したので妻子共々死刑になった人である。しかし願いは叶えられたという。成田市に立派な宗吾霊堂が建っている。穴井の霊堂は明治初期に井上宝生が、成田の霊堂から分霊して祀っているものである。祭日は桜の満開の頃の4月3日で、相撲なども催され、穴井の港は近隣の村々からの参拝客で大変賑わったという。

た 橙苗も 萬拙和尚も 三崎から

明治24年真網代大圓寺に松澤萬拙師を第9代世住職として、三崎村から迎える。三崎では、そのころ夏橙（なつだいたい）が栽培されていた。果樹に興味を持った人たちが、有効な果樹として少数の苗木を取り入れ、試験的に桑畑けに植えたのが柑橘栽培の始まりである。明治33年阿部大三郎氏が立間村（現在宇和島市）加賀山金吾氏より、みかん苗木300本を求め移植する。その後、夏柑・ネーブルオレンジ等栽培熱が高まり基幹産業となった。

ち 稚児の舞 鈴の音響く 浦祭り

1690年、真網代浦の浜辺に蜷（にな）がきわめて多く付着して、美しく輝いている不思議な石が見つかる。浜の人たちは、住吉大明神の化身であるとのお告げにより、字やりの元に新殿を構え大祭日を決めて祀る。春祭りには、高台の境内から鳥居をくぐり、道切りの天狗や牛鬼に続き長いお練りの行列が続く。特設会場の神のお旅所では、玉串祈願のあと伝統芸能が次々奉納される。その第一番が小学生の稚児の舞である。

つ つどいきて 御詠歌響く 大圓寺

昭和20年8月15日は終戦日である。戦争で犠牲になった尊い御霊が靖国神社に祀ってある。妙心寺の師範は、靖国和讃の指導にあたられ遺族の方たちを慰めた。昭和26年大圓寺先住職も同時に支部を発足し、御詠歌（ごえいか）を通して民衆の布教に努めた。昭和46年現住職に引継ぎ、寺庭準師範指導の下、毎月15日は本尊講を20日大師講を行い、年中行事としてお釈迦様の花祭り・お地蔵さんの縁日・お施餓鬼法要などに御詠歌を奉詠している。

て 天皇杯 先人たちの お陰です

明治24年、真穴に柑橘が導入されて以来、山頂まで石垣を積み上げみかん畑を広げていった。その間、品質向上に務めるとともに、東京市場の開拓、マルマブランドの高揚、選果場建築とみかんの一大産地を築きあげた。みかんの品質の優秀さとともに、産地作りの功績が認められ、昭和39年、柑橘導入以来73年目にして天皇杯の栄に輝いた。

と トロール漁 始めた人は 柳澤翁

柳澤秋三郎翁は明治10年真網代に生まれる。24歳の時大志を抱き渡米した。ホテルの皿洗い、鉄道工事などに6年従事し、事業資金を得て30歳の春帰国し製網会社を経営した。やがてトロール漁業（機船底引き網漁業）に取り組むこととなり、愛媛県トロール漁業の先覚者となった。戦時中は、海軍へ飛行機一機を献納した他、真穴国民学校へオルガンを寄付するなど郷里のためにも尽くした。没年昭和35年1月。

な 波しずか 養殖筏 かもめ舞う

昭和36年頃より「とる漁業から育てる漁業」というキャッチフレーズのもと川上湾・八幡浜湾・大島で養殖が始まった。穴井地区でも2業者がハマチ養殖を始めた。一時は八幡浜全体で17業者程あったが、昭和55年頃には資金・価格・技術・場所等の理由で減少した。現在穴井では4業者となり鯛・鮪・皮ハギを養殖している。養殖飼料は地元の小鮪・鰯から冷凍魚へ、そして最近はペレットに変わった。潮流の関係か、この地域の魚が美味しいと好評で出荷も全国に広がっている。

に 日本一 甘くておいしい 真穴みかん

柑橘が導入されてから。夏柑・ネーブル・普通温州・宮川早生と、真穴に適するみかんの模索が始まり、先人たちの長年にわたる努力の末、県知事賞・農林大臣賞・天皇杯w p受賞するに至った。自然の恵みと生産者の愛情に育まれ、味や品質の良さ安定的出荷などは、多くの消費者の信頼を得ている。今では日本のトップブランドとして知れ渡っている。

ぬ 布を織る 工場栄えた 時代あり

江戸末期、穴井・五反田・矢野町諸村で。農漁家の副業として手織り木綿を織ることが盛んであった。三好徳三郎は、先進地を視察し、明治8年織物工業を創業する。彼の考案した柄が好評で販路は沖縄・東北・九州西南と拡大する。品不足で宮崎あたりに生産を委託し、穴井港はその製品の集出荷でにぎわった。明治中頃には山下・中栄工場が、大正になって中広・門石・山内工場が創業し昭和の中頃までつづいた。

ね ねずみ島 歩いて渡る 潮干けば

大釜（おおがま）の国道沿いの海に浮かぶねずみ島は、干潮になると海の中から道が現れ歩いて渡れるようになる。このような道を地学用語でトンボ口（陸繋砂州）という。名前の由来は、独特な地形がねずみに似ているからと一般に伝わっている。佐田岬半島宇和海県立自然公園の中にあって「八幡浜のガラパゴス」と愛称され、春先からは貝掘りや磯遊びを楽しむ人が集まり、ねずみ島ワンダーランドとして多くの人に親しまれている。

① 農道の 開通みかんの 里栄え

真穴地区は、早くから柑橘産業に取り組み、海岸から山頂に至るまで石積の段畑でみかん栽培には恵まれた土地である。みかん、肥料などすべてを、にわく（おいこ）で運搬していた。運搬の苦労は筆舌に尽くせないものがあった。そこで農道を作るなど（昭和8年着手）基礎整備事業を進め現在に至っている。真網代住吉神社上や農道オノヒラなどに記念碑が建立されている。

は 同胞の 幸せ祈る アメリカ講

明治時代、真穴をはじめ渡航熱は近隣の村々にも広がった。明治38年には、アメリカ渡航者の家族を中心とする人たちによって、渡航者の無事を祈るアメリカ講「萬歳講」が作られていた。年に何度か渡航者の家族が氏神様に集まり、お籠りをして宮司さんにお札やお守りを作ってもらい、それをアメリカで働く家族の元に送った。アメリカ講は、海外渡航者を出した各集落ごとに行われた。

ひ 百年碑 唐崎監視所 跡に建つ

平成4年10月に「真穴みかん導入百年之碑」が建立。扇状の5段の階段は100年の歴史の軌跡を表し、天に向かって聳え立つ。「百年之碑」は若者への限りない前進の期待の証である。百年碑が建っている唐崎（とうざき）には戦後に一時期監視所があった。

ふ 福高寺 十六羅漢の 面優し

この石仏は、福高寺（ふっこうじ）の山門に至る石段の左右に、16体安置されている。同寺に、石仏に関する古文書が残されている。それによると、1789年（寛政10年）大島から石を持ち帰り、同年10月摂州坂府（現在の大阪）の石工に彫らせた。十六羅漢とは、永くこの世に在住して煩惱を抹殺し、正法を護持するという16体の尊者の事をいう。石仏の顔それぞれに個性がよく表現されており、石造美術としてすぐれた作品である。昭和56年市指定文化財（石造美術）となる。

へ 平和への 道を願いて 招魂碑

真網代の招魂社にある平和の塔は、昭和42年、真網代区によって建てられた。「散りゆきし、つわもの共を偲びつつ、今日も歩まん平和への道」と刻まれてあるように、戦後60有余年たった今日、尊い生命を捧げ、平和と繁栄の礎となられた戦没者並びに殉職者の方々の追悼の意をこめて、毎年10月に慰霊祭を開催している。二度と過ちを繰り返さないよう子孫に伝えている。穴井は天満神社に慰霊碑がある。

④ ホータレを 夜ごとに大漁 四つ張網

宇和海は、潮流が緩やかなためカタクチイワシの漁場として発達した。四つ張網（よつぱりあみ）は宇和海で最も盛んに行われ、漁網を海中へ正方形に沈め灯火で集魚して網を引き上げる漁法である。昭和30年頃より集魚灯の発達により大量のイワシがとれ、数キロメートルの海上は不夜城の観を呈した。イリコにしたり処理できない時は肥料として活用した。昭和40年頃より魚群の回遊が少なくなると共に、乗員が他産業に転向したため人手不足となり四つ張網の漁法は姿を消した。（カタクチイワシのことを方言としてホータレと呼んでいる）

ま 真穴小中の 校歌に残る 飯之山城

飯之山城（いのやまじょう）は、海拔300mの山頂にある。古くからあった城で、1681年に出された宇和日記には「飯之山とて古城あり、城主の末裔後穴井浦庄屋となる」とあり、同時期に出された吉田古記には「此の城郭昔此の辺の領主要害第一の構」とある。1580年頃土佐の長宗我部軍が来襲し落城。その時の悲話が数々伝えられている。穴井には飯之山講があって年に数回は山頂の神社に参拝して、付近の清掃等を行っていた。

み みかん山 蚕に代わって 百十余年

明治末期、現金収入を求めて、みかんと養蚕が取り入れられた。みかんは換金までに長期間かかるため、副業的役割でしかなかった。しかし、生糸価格の暴落や労働のきつさなどから、桑畑の中にみかん苗が徐々に増えていった。昭和初期、宮川早生の優秀性が確認されると、みかん栽培に拍車がかかり、昭和12年に生糸組合は解散し桑畑は一気にみかんへと更新された。

む 無病息災 豊作祈る 穴井神楽

穴井神楽は江戸時代に代々の神主によって伝えられた。その後、明治末期から大正初期に近隣の里人に伝授され、一般の人々が行うようになった。昭和30年に中断したが昭和48年に再び行うようになり、現在に至っている。内容・演目は近隣で行われている神楽と同一のもので、豊作や家内安全を願い神様に奉納される舞である。

め 名優を 多く生み出し 穴井歌舞伎

穴井歌舞伎は、1783年（天明3年）正月11日に、伊勢踊りの和気踊り（わきおどり）として創設上演された。以来毎年、旧正月の11日と15日に盛大に上演されてきた。近隣の村々からも招かれて上演すると、本当の役者が数人は居るのではないかと称賛されたという。戦後は往時の名優達の指導で青年団が上演していたが、昭和30年以降はすたれた。衣装やカツラ、小道具は公民館で保存されており、平成14年8月に市の有形文化財に指定された。

も

縋子網の 機械発明 薬師神兄弟

明治28年、先々代薬師神傳治氏が、原所で縋子網（もじあみ）製造を創業。大正15年法人化し当社の社長に就任する。その後、弟清綱氏が継承する。新たに、昭和10年11月特許登録する。昭和49年、現社長就任し今なお製造されている。業種は製網。取り扱い品は縋子網（曳き網 養殖ネット等）。特色はナイロン縋子網であり、専門メーカーとしては創始者的存在である。先々代傳治氏、清綱氏兄弟によって機械が発明され、後々の漁業に大きな影響を与えた。

や さしくて 強く育てと 座敷雛

真穴座敷びなは、その家の長女の初節句の祝いとして行っているもので、盆栽や小道具を用いて座敷いっぱいミニ庭園を造り、そこに豪華なひな人形を飾りたてる。ひな人形を庭園に配した座敷びな独特の趣向は、ちょうど古い時代の宮廷の園遊会の絵巻物を見るかのような感じがする。4月2・3日は、全国各地からの観光客で、にぎやかな2日間となっている。平成14年8月に市無形文化財となる。

ゆ 夕映に 染まるアコウ樹 三百余年

真網代の旧庄屋屋敷の裏山に自生しているアコウは昭和36年8月5日に市指定天然記念物となっている。幹まわり約7メートル、枝振り約23.8メートル、樹齢はおよそ300年くらいで八幡浜では真網代のアコウ樹が一番大きい。アコウはクワ科の亜熱帯の高木で幹の周囲から呼吸のため気根を出し、葉は楕円形で、春、枝または幹に淡紅色の果実をつける。別名「たこの木」といわれる。

よ ヨイショ ヨイショ 力合わせて 地引き

地域の連帯意識の高揚を図り、絆を深めていくためとの事業として、地域文化振興協議会北針より、地域の特性を生かした地引き網はどうかと提案があり、真穴の子どもを育てる会主催で、地区公民館、北針が後援し平成8年度より実施することとなった。保育園児・小中学生・一般区民が参加し共に網を引く楽しさと収穫の喜びを味わいながら絆を深めた。次の年より、他校の子どもたちと交流し、互いに郷土のよさを再確認する行事となっている。

ら 楽焼を 楽しむ子らの 真穴窯

現在真穴小中学校体育館のそばにある真穴窯は三代目である。夏休みの前に小学生が粘土作品を作り、窯入れをし、夏休みキャンプ時に先生・保護者が一昼夜かけ薪を焚く。二学期に窯出しを行う。続々と運び出された作品一つ一つに作った子どもたちの思いが感じられる。個性に富んだ焼き物もあり、作品は愛媛こども美術展に出展し優秀な成績を収めている。

り 臨済禅 その名も高し 西山禾山

1837年（天保8年）12月24日穴井浦に、父須賀吟助、母トクの4男として生まれた。13歳の時、大宝寺瓊谷和尚の弟子となり得度し禅鉄と名付けられる。明治7年師の名を継ぎ西山禾山（かざん）となる。漢学を学び諸国修行を重ね、まれにみる臨済宗の傑僧となる。明治44年大宝寺の大火で大火傷をし「焼け和尚」の異名をとる。その後も全国を講演。参禅する者も多く政治家河野広中、彫刻家平櫛田中、詩人高村光太郎も参禅。大宝寺に田中作、禾山像。福高寺に、禾山生誕碑がある。

る ルーツは 元城 真網代旧庄屋

真網代の旧庄屋二宮家は、記録によれば戦国時代矢野郷の領主摂津豊後守実現が五反田元城を居城とし、その子実親が馬目網代・穴井・大島3ヶ所の領主となり真網代に居住とある。その時代は真穴地区も摂津一族が治政と防備に当たっていたものと思われる。子孫は代々真網代の庄屋を受け継いだ。現在の当主直之氏は16代である。元城は今は八幡浜市五反田に地名として残っている。

れ 練習の 声賑やかに 亥の子宿

「目出度いな 目出度いな 目出度いもの おみかんよ 天から下った五大神が黄金の衣を身にまとい この家繁盛と舞を舞う 目出度いことではないかいな」旧暦の10月、亥の日が近づくと亥の子の歌声がする。前夜祭には、ヒヨズ川で清めた亥の子石と神輿に菊の花を飾り大きな餅を供える。朝早く、神輿や神々の名を染めた幟旗を持ちまわりながら、園児から中学2年生の子どもたちの元気な歌声で祝われる。

③ ロンデ越え 女学生達の 夢の跡

ロンデとは山の名前。飯之山（いのやま）から垣生（はぶ）へ行く道の穴井側をいう。大正9年山下亀三郎氏が三瓶安土に、女子教育が必要と第二山下実科女学校を創立。真穴からも夢をいただいた女学生達が徒歩でロンデ越えをして通学をした。昭和22年男女共学山下西南中学校を併設し、翌年、新制男女共学山下西南高等学校として発足。更に県立三瓶高等学校となる。その後通学は船、自転車、バスとなりロンデ道は女学生達の夢の跡となった。

① わが町の 文化の中心 公民館

真穴地区公民館は、昭和46年に開館。それまでは真網代公民館・穴井公民館として運営されてきた。両公民館は、現在は真網代自治公民館・穴井自治公民館として、それぞれが独自の活動を活発に展開している。真穴地区公民館は両自治公民館をはじめ各種団体と連携を密にし、「豊かなふるさとづくり」を目標に、活力と潤いのある地域社会の実現、声掛け合い助け合う温かい地域社会の実現に努めている。その活動が認められ平成19年には優良公民館として文部科学大臣表彰を受ける。